



## 煮る、焼く、漬けてもおいしい 万能野菜 冬春ナス

「一富士、一鷹、三茄子」と言われるように、ナスは縁起の良いものとして、また、料理に欠かせない食材として古くから重宝されてきました。ところで、ナスの旬といえば夏や秋を思い浮かべるかたが多いのではないのでしょうか。ナスは高温多湿を好む野菜のため、岡崎の特産「夏秋ナス」は、7月中旬から9月に収穫の最盛期を迎えます。それに対して、3月から5月にかけて最盛期を迎えるのが「冬春ナス」です。露地で栽培される夏秋ナスと違い、ビニールハウスで栽培するため、気温の低い10月から翌6月末にかけて収穫することができます。

市内で冬春ナスの栽培が始まったのは、昭和30年代のこと。豊かな土壌と温暖な気候がナスの栽培に適しているため、現在も矢作地域を中心に、31軒の農家が年間約千トを出荷しています。昭和40年代から栽培されている品種が「千画」

で、皮・果肉ともに軟らかく、肉質のきめが細かいのが特徴。安定して質の高いものが出荷されると、市場で好評を得ています。



冬春ナスの苗は夏の終わりに植えられ、11月下旬からは暖房機で加温します。ナスは寒さに弱いいため、冬場の温度管理には細心の心配りが必要です。また、ナスの実には光が当たることによって色が濃くなるため、光が当たらないようにまめに整枝や葉の剪定を行います。特に大変な作業が受粉です。ハウス内では、風がないことや受粉を助ける昆虫がいなかったため、手作業やミツバチをハウス内に放って受粉を助けなくてはいけません。そこで、平成22年から受粉しなくても結果する新品种「とげなし美茄子(写真)」を導入。生産量も次第に増えています。

3月17日(出)には、おかざき農遊館で「なすフェア」を開催します(詳しくは13ページに掲載)。地元の英傑・徳川家康公も大好物だったといわれるナス。冬春ナスと夏秋ナスで、一年中楽しむことができますので、色々な料理に活用してみたいいかがでしょうか。

農務課 023・6199

## 「よくわかる病気の話」 20代・30代の女性に増加中 子宮頸がん(けいがん)に要注意

子宮にできるがんは、子宮の奥の方にできる「子宮体がん」と、入り口部分にできる「子宮頸がん」の二種類があります。この二種類のがんは、発生する場所だけでなく、原因や発生しやすい年齢なども全く異なります。今回は、若い女性に増えている子宮頸がんについてお話しします。

日本では、年間8千人以上の女性が子宮頸がんにかかり、約2500人のかたが亡くなっています。女性特有のがんとしては、乳がんに次いで患者数が多く、20代・30代の女性では第1位となっています。

子宮頸がんの原因は、性行為で感染するヒトパピローマウイルス(HPV)と考えられています。HPV感染で子宮頸がんが発生する率は0・1割〜0・3割で、発がんするまで10数年かかると言われています。初期症状はほとんどなく、進行すると悪臭のするおりものが増えたり、不正性器出血が現れたりします。

子宮頸がんには予防ワクチンがあります。昨年からは、市でも3年生から高校2年生に当たる女性に対し、予防ワクチンの公費助成(一部自己負担あり)による接種が開始されました。ただし、ワクチン接種はがんを完全に予防できるものではないので、定期的に検診を受けることが大切です。

ところが、日本の子宮がん検診受診率は低く、欧米が8割近くあるのに対し、日本の受診率は2割台前半にとどまっています。子宮頸がんは、ワクチン接種と検診で、予防や早期発見ができます。また子宮がん検診を一度も受けたことがないかたや、ここ数年子宮がん検診を受けていないかたは、早めに検診を受けましょう。

岡崎市民病院 産婦人科

統括部長 榊原 克巳

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。